

論文

# 『鴻跡帖』と清国留学生

孫 倩\*

表1 揮毫者の分類

留学生	第二冊	早稲田大学清国留学生部, 専門部, 大学部などの卒業生
	第四冊	
	第五冊	
	第七冊	
留学生以外の者	第一冊	清国要人
	第三冊	進士
	第六冊	皇族・官員

『鴻跡帖』全七冊, 拙稿「史料『鴻跡帖』の一考察」より作成

## はじめに

『鴻跡帖』は主に早稲田大学清国留学生が揮毫した卒業記念帳である。<sup>(1)</sup> 現段階では, 先行研究は高木理久夫氏「早稲田大学図書館所蔵『鴻跡帖』について」<sup>(2)</sup>と拙稿「史料『鴻跡帖』の一考察」<sup>(3)</sup>のみである。これらは人物調査とその分析が不十分であり, 検討の余地があると考ええる。

表1において, 『鴻跡帖』の揮毫者を留学生とそれ以外の者とで分類した。本論では, 留学生関連の第二・四・五・七冊の内容について, 『早稲田学報』や『早稲田大学百年史』から関連情報を収集し, 『早稲田大学中国留学生同窓録』(戊申夏刊)を参考にしたいうえで, さらに中国側の資料や著作を活用し, 留学生調査と分析を行う。

第1章では, 個別の事実を整理する。第2章では, その整理した事柄からどのような情報が導けるのかを分析する。

なお, 留学生以外の者に関する調査(第一・三・六冊)は本論では省略し, 別稿で論述する予定である。

## 第1章 留学生調査

本章では, 「年齢」, 「出身地」, 「住所」, 「留学費用」, 「教育歴」, 「帰国後の活動」を中心に, 揮毫した留学生を紹介する。<sup>(4)</sup>

### 1.1 第二冊の留学生について<sup>(5)</sup>

第二冊に揮毫した留学生全員53名のうち, 39名は明治39年(1906)清国留学生部予科第一回卒業生<sup>(6)</sup>, 1名は明治41年(1908)清国留学生部師範本科博物学科卒業生であり, 残り13名は不詳である。

#### 1.1.1 年齢

彼らの多くは1880年代前後に生まれた20代の若者である。その年齢層は18歳から35歳まで, 幅広く分布している。20代の者が多数であるが,

\*早稲田大学大学院社会科学研究所 博士後期課程6年(指導教員 古賀勝次郎)

30代も10名ほどいる。

### 1.1.2 出身地

彼らの多くは、中国南方地域<sup>(7)</sup>出身であった。表1-1に、それぞれの地域の出身者を区分した。

表1-1 出身地について (第二冊)

	省名	人数 (人)		省名	人数 (人)
	南方 地域	湖北		12	北方 地域
江蘇		8	陝西	2	
安徽		4	山西	1	
浙江		3	奉天	1	
四川		3			
広東		2			
湖南		2			
広西		1			
貴州		1			
江西		1			
小計	10省	37		4省	7
合計	14省, 44人				

「第二冊の留学生に関する参考文献(注5)」より作成(直隸省は現在の河北省の地域には該当する。奉天省は遼寧省の旧名。中国では、23省・5自治区・4直轄市・2特別行政区に分けられ、計34の省級行政区が存在する。)

### 1.1.3 住所

留学生の生活の場を表1-2にあらわした。留学生6人の住所は、いずれも学校の周辺にあり、通学に便利な場所に住んでいたと考えられる。<sup>(8)</sup>

表1-2 住所について (第二冊)

氏名	住 所
王燮元	東京牛込区下戸塚町十一番地牧山方
崔雲松	東京早稲田区鶴巻町昇盛館
鄭賓	豊多摩郡下戸塚村六百二十八番地
胡錫璋	早稲田第二宿舍
段寶田	鶴巻町二百九十四地春芳館
張起元	牛込区高田八幡坂求信館

「第二冊の留学生に関する参考文献(注5)」より作成

### 1.1.4 留学費用

留学費用について、判明した18名のうち、官費留学生が最も多く、15名であった。それに対して、私費留学生は僅か3名となっている。

### 1.1.5 教育歴

本冊の留学生たちはどのような教育を受けていたのかを解明するため、彼らの教育歴を調査した。判明した留学生43名の内、来日前、中国国内の学堂を卒業した学生は6名いた(俞道暄、繆其瑞、劉鴻樞、張文煥、馬樹榮、周家堪)。その他、清国留学生部入学前、梁白元は同文書院を中退した。陳培琛は弘文学院を中退した。黄培元は同文書院を卒業した。清国留学生部予科卒業生40名の内、校内進学者は24名おり、教育歴が判明した者43名の内の約59%を占めている。

24名のうち、清国留学生部師範本科に進学した者は10名いた(王燮元、胡遇璜、鄭賓、林楷、尹欲仁、范恆、劉吉星、張起元、陳錫朋、黄培元)。その中の2名(鄭賓、張起元)は、さらに同部研究科に進学した。また、大学部に進学した黄識を除き、専門部への進学者は13名いた(胡国臣、漆仁颺、陳同壽、許孝綏、褚辛培、李宗藩、熊成章、張文煥、趙鴻藻、陳培琛、周家堪、田永正、劉德昭)。

### 1.1.6 帰国後の活動

帰国後、北京学部試験(科挙の代わりに実施された、人材登用試験の一種)に受かった者は6名いた(許孝綏、褚辛培、熊成章、張文煥、趙鴻藻、劉德昭)。北京学部試験に関して、『早稲田学報』にはその関連記事を載せている。

「<sup>このかい</sup>今回北京學部に於て本邦及歐米諸國留学の卒業生に對し學部試験を舉行し最優等及第者

(進士)十五名優等及第者(舉人)四十五名中等及第者(舉人)四十七名登第せし<sup>(9)</sup>

とあるように、1905年に科挙制度が廃止された後<sup>(10)</sup>、留学は一つの登竜門となっていた。帰国後の留学生たちは北京学部試験を通じて、出世の道を歩んでいった。

追跡調査で帰国後の活動を明らかに出来た者は10名である。彼らの履歴は以下のようになる。

- 1 崔雲松 陝西財政局局長、陝西都督府参事、法制局局長、陝北観察使、国会衆議院議員を歴任。<sup>(11)</sup>
- 2 鄭賓 淮安中学校校長、江蘇省第六師範教員、漣水甲種師範校長、漣水県教育局局長、漣水県公金公共財産管理处主任などを歴任。<sup>(12)</sup>
- 3 洪允祥 近代学者、文学者。帰国後、『天鐸報』の編集長、温州中学、上海大夏大学、北京大学、浙江省立第四中学校の教員。著作は『悲華精舎詩存』、『悲華精舎文存』、『悲華精舎小説存』、『醉余隨筆』、『樵船詩話』。<sup>(13)</sup>
- 4 林楷 浙江省立第十一中学校校長<sup>(14)</sup>
- 5 段寶田 営口商業学堂に勤務、営口勸学所理事。<sup>(15)</sup>
- 6 熊成章 1913年、中華民国衆議院議員。南京臨時政府秘書処総務会長、参議院議員、四川涪江法政専校校長・教授などを歴任。<sup>(16)</sup>
- 7 劉鴻樞 1909年-1911年、龍江府地方審判庁裁判官。<sup>(17)</sup>
- 8 周家堪 甘肅省檢察庁庁長、湖北省議會議員。<sup>(18)</sup>
- 9 田永正 1910年、帰国。黄興、宋教仁、卢炳文らと革命運動に参加。1911年、辛亥革命に参加。中華民国が成立したあと、総統府顧問に任命された。1913年、中華民国参議院議員となった。その後、初代大総統についた袁世凱が独裁をつよめ、帝政実現をはかったため、反袁運動に参加。男女平等を提唱し、婦人の纏足に反対。<sup>(19)</sup>
- 10 印煥門 留日四川同郷会幹事長に挙げらる。帰

国後、成都電報局局長、四川法政学堂の教員、商業学校の教務主任、校長を歴任。<sup>(20)</sup>

これらの人々の共通点として二点を挙げられる。一点目は、彼らの経歴は多岐にわたっているという点である。たとえば、鄭賓と周家堪の例を挙げて説明する。鄭は教育に一生をささげた教育者であり、革命に支持を与えた人物でもある。周も法律家と政治家の二つの身分を持っていた人物である。二点目は、彼らが早稲田大学で学んだ専門知識や基礎知識を十分に活用し、各分野で活躍したことが推測出来る点である。また、彼らの学習歴と職歴に一貫性があることも指摘できる。

## 1.2 第四冊の留学生について<sup>(21)</sup>

第四冊に揮毫した留学生94名の内、明治40年(1907)清国留学生部予科第二回卒業生が76名<sup>(22)</sup>、同42年(1909)清国留学生部師範本科博物学科卒業生が1名、同43年(1910)専門部政治経済科卒業生が2名、同45年(1912)専門部政治経済科卒業生が1名いた。そのほか、14名の所属は不詳である。

### 1.2.1 年齢

本冊の留学生は、第二冊に比べて、年齢が17才から37才までのより広い範囲で分布していた。こちらも20代の者がメインであるが、30代の者が増えて、13名いる。

### 1.2.2 出身地

表1-3に、留学生77名の出身地を示した。第二冊と同じように、北方地域より南方地域出身の留学生が多いことが明らかとなったが、南北地域の関係省の数はほぼ同数である。

表1-3 出身地について（第四冊）

地域	省名	人数 (人)	地域	省市名	人数 (人)
	南方 地域	江西		17	北方 地域
江蘇		8	河南	5	
湖南		7	直隸	4	
湖北		6	山西	4	
四川		6	山東	2	
広西		6	吉林	1	
広東		2	陝西	1	
浙江		2	北京	1	
小計	8省	54		7省 1市	23
合計	15省1市, 77人				

「第四冊の留学生に関する参考文献（注21）」より作成

### 1.2.3 住所

本冊の留学生の住所については、第二冊と同様に、早稲田大学の近辺に住んでいたことがわかる（表1-4）。

表1-4 住所について（第四冊）

氏名	住所
鄭峻徳	神田修養館
紀萬韜	東京牛込区鶴巻町八洲館

「第四冊の留学生に関する参考文献（注21）」より作成

### 1.2.4 留学費用

留学費用について、判明した36名の中では、官費留学生が19名、私費留学生が17名であった。第二冊の留学生に比べて私費留学生の割合が大きくなり、半数近くを占めていた。

### 1.2.5 教育歴

彼らの教育歴について、80名が判明した。来日前、中国国内の学堂を卒業した学生は2名であった（安兆鼎、王曾培）。

清国留学生部予科卒業生76名の内、同部本科に進学した者は5名いた（王英濼、周道萬、劉和

理、黄化宇、黄紹樞）。また、専門部に進学した者は28名であった（李国珍、吳煥然、岳秀華、劉啓晴、黄耀鳳、張振鏞、徐炳元、曾有瀾、宗奇、劉濂、黄紹魯、舒祖勳、唐重華、夏嵩、張乙林、王曉東、段世垣、倪亞鳴、陳受中、羅家衡、紀萬韜、張家珩、唐忠信、黄玉溶、邱冠棻、張麓、黄爵文、潘学海）。上述したように、進学者は33名であり、教育経歴が判明した80名の内の約41%を占めていた。

### 1.2.6 帰国後の活動

「帰国後の活動」を調べたところ、21名の履歴が判明した。

- 1 藍鼎中 有名な弁護士として活躍していた。<sup>(23)</sup>
- 2 李国珍 1912年、江西省議会議員、北京臨時參議院議員。国会議員、憲法起草委員。1913年、ドイツに留学。1914年、帰国。1915年、政事堂參議。1916年、國務院參議、教育部次官、農商部次官。編纂所所長、成績審査会会長、林務処監督。1917年、全国水利局総裁。<sup>(24)</sup>
- 3 張善與 1911年、孫文の秘書。1912年、南京參議院參議員。1919年、中国国民党中央委員、衆議院委員。1924年、河南党部自治区準備處處長。1925年、開封で建国中学を創設。1930年、河南省北部に旱魃に遭った時、排水工事を行った。その後、道路を設け、小学校を創設、河朔図書館を設立。1934年、国民党河南省党部主任委員、省衆議院議員。1940年、河南省北部で抗日活動に参加。日中戦争後、建国中学を再建。国共内戦中、建国中学分校を増設。1949年より、台湾で隠居。<sup>(25)</sup>
- 4 陳伊炯 江蘇武進地方審判庁裁判官、最高裁判所裁判官、そして同裁判長を兼任。<sup>(26)</sup>
- 5 蔣曦明 湖北省議会議員、国会參議院議員を歴任。<sup>(27)</sup>
- 6 曾有瀾 江西省第一回衆議院議員、裁判官。訳

著は副島義一『日本帝国憲法論』（曾有瀾・潘学海訳）。<sup>(28)</sup>

7 周道萬 1911年，帰国。両江師範学堂物理教員，江西省德興県県長，長汀県県長，応州元帥の秘書。<sup>(29)</sup>

8 劉濂 1908年，帰国。1911年，湖北省都督府司法局局長。1912年，国民党黨員。1913年，中華民国参議院議員。反袁運動に参加。婦人の纏足，男性の弁髪に反対。1916年，国会議員。1917年，江西司法行政委員長。1923年，海陸空大元帥顧問。1925年から，江西法政専科と私立豫章法政専科学校を創設，校長を担当。弁護士事務所を開設。1939年，贛南中学位理事長。<sup>(30)</sup>

9 夏嵩 法政挙人。山東泰安知県。1913年，塩城県教育款産經理処主任，全県の教育事務を担当。「減租減息」運動の中で，民主政治の地租軽減の法令を守った。<sup>(31)</sup>

10 湯増壁 武昌蜂起後，戦時総司令秘書。1914年，長沙船山学社の教員。中国でのエスペラントの普及に貢献。1945年，国民党中央党史史料編纂委員会編纂者，国史館編修者，秘書。1946年，国民代表大会の代表。著作は『同盟会時代民報始末』，『同盟感录』，『先烈伝記』，『革命実录』，『総理年譜』など。<sup>(32)</sup>

11 何煥奎 1907年，清国留学生部予科卒業。1908年，千葉医学専門学校（現：千葉大学医学部）に入学。1913年，医学学士の学位を取得，帰国。南昌で豫章医院を創設，当時江西省に数少ない医者（西洋医学）の一人。学校医や医学基礎知識教員を兼任。1922年，江西医学専門学校を創設，校長と外科学教員を兼任。1926年，ドイツに留学，ベルリン大学で博士号を取得。1929年，江西省で第一の公立病院南昌市立病院を創立，院長を担当。江西医学専門学校教授を兼任。1930年，南京国民政府衛生部に勤務。衛生統計局局長代行。1931年，南通大学医科主任，病理外科学教員。1933年，江西医学専門学校外

科主任。1935年から，診療所を経営。日中戦争中，医者をやりに，医学研究も継続。1953年，南昌專署衛生科，漢方医研究院に勤務。<sup>(33)</sup>著作は『新中華健康教育』<sup>(34)</sup>，論文は「従巴甫洛夫学説来看仲景『傷寒論』」<sup>(35)</sup>がある。

12 汪東 1910年，帰国。1912年，北洋政府との対抗活動に参加。1923年，章太炎らと一緒に上海で『華国月刊』を創刊。1925年，江蘇省長公署秘書。1927年，第四中山大学教授，国語科主任。1928年，第四中山大学を国立中央大学に改称した時，校歌を作詞。1930年，該校文学院院长。1938年，国民党政府監察院監察委員。1943年まで，復旦大学国語学教授。日中戦争後，国立礼楽館館長。1947年，国史館編集者。1950年，蘇州市人民代表，人民委員会委員。1954年から，蘇州市政協常務委員会委員，副主席，江蘇省政協常務委員会委員，中国国民党革命委員会（略称：民革）蘇州市委員会主任，民革中央團結委員，民革江蘇省委員会副主任を歴任。著作は『夢秋詞』，『鄭校「清真集」批語』など。<sup>(36)</sup>

13 朱鴻鐸 山東省初回の議会会員，山東堂邑県知事，平原省政協委員，山東省政協委員，省人大代表，山東省文史館館員，湖西專署清案委員会委員を歴任。<sup>(37)</sup>

14 段世垣 雑誌『豫報』・『河南』の創刊に尽力。開封で商業学校を創設，校長となった。河南法政学堂教員を兼任。1913年，河南議会議員，国会参議院議員，憲法起草委員会委員，袁世凱大統領府秘書。反袁運動に参加。1914年2月，逮捕され，同年7月，密殺された。<sup>(38)</sup>

15 蕭增秀 山西省統計処に勤務。革命運動に参加。山西商業専門学校校長，山西大学教授。1918年，1921年の山西省議会議員。<sup>(39)</sup>

16 崔鎮岳 1914年，山西省公立河汾中学教員。<sup>(40)</sup>

17 陳受中 陝西法政専門学校校長，参議院議員，

陝西省議会議長、山西大学・山西商業専門学校教授、山西省政府委員、教育庁庁長。著作は『行政法総論』、『瑞土国法論』、『地方自治要論』、『憲法講義大綱』、『三民主義講義大綱』。訳書は『政治学説史』、『倫理学説之研究』。<sup>(41)</sup>

18 羅家衡 江西政法学校を創設。1917年、北京政府内務部長、中華民国軍政府護憲委員。廖仲凱、胡漢民と一緒に『中華民国非常時期憲法』を検討。1923年、上海で弁護士事務室を創立、弁護士となった。1949年から、華東軍政委員会委員、上海法学会会長、市人民代表大会代表、市政协協商委員会常務委員、市文史館館員を歴任。<sup>(42)</sup>

19 程蘭湘 南昌市豫章政法専門学校校長<sup>(43)</sup>

20 邱冠棻 1912年、江西理財局局長。1913年、財政司主計科科長、衆議院議員。江西政法学校教員。1919年、衆議院議員。1922年、再び議員。<sup>(44)</sup>

21 潘学海 1913年、中華民国衆議院議員。<sup>(45)</sup>訳著は副島義一『日本帝国憲法論』（潘学海・曾有瀾訳）。

以上のように、留学生たちは各分野で活躍していた。とりわけ医学分野で活躍し、多大な貢献をした医学者の何煥奎のように、医学を専攻し、博士号を取得した人物は当時少なく、貴重な存在であった。彼がした帝王切開術、腹膜炎、子宮腫瘍摘出などの手術は、江西省の医学界初の事例であった。<sup>(46)</sup>また、1925年、彼はドイツのベルリンからX線検査機を中国に持って帰った。その機械を用いた病気の検査も江西省では最も早かった。<sup>(47)</sup>彼は医学教育・研究に取り組んだのみならず、医者として命を救うことにも尽力した。無論、早稲田大学には医学専攻がなかったが、何煥奎は、最初の留学先である早稲田大学で基礎的な知識を身につけたことが考えられる。

### 1.3 第五冊の留学生について<sup>(48)</sup>

第五冊に揮毫した留学生64名のうち、52名は明治39年（1906）清国留学生部予科第一回卒業生<sup>(49)</sup>、同41年（1908）清国留学生部師範本科物理化学科卒業生が2名、同39年（1906）専門部政治経済科卒業生が1名、同41年（1908）専門部政治経済科卒業生が1名、同39年（1906）研究科卒業生が1名おり、ほか6名は不詳である。

#### 1.3.1 年齢

第五冊に掲載されている者達の年齢は第二・四冊と比較すると、30代の者それほど多くない。

#### 1.3.2 出身地

第五冊の留学生の出身地を表1-5にあらわした。第二・四冊に揮毫した留学生は南方地域出身者が多いことに対して、第五冊の留学生は、北方地域出身者が南方地域出身者を超え、特に直隸省・北京市出身の者が多い。

表1-5 出身地について（第五冊）

	省名	人数 (人)		省市名	人数 (人)
	南方 地域	江蘇		6	北方 地域
湖北		4	山西	1	
四川		4	奉天	1	
安徽		3	河南	1	
湖南		3	北京	15	
浙江		3			
貴州		1			
小計	7省	24		4省 1市	38
合計	11省1市, 62人				

「第五冊の留学生に関する参考資料（注48）」より作成

#### 1.3.3 住所

本冊に掲載されている留学生7名の住所を明

らかにした(表1-6)。これらの住所は第二・四冊とほぼ同じエリアにある。

表1-6 住所について(第五冊)

氏名	住 所
汪翔	鶴巻町宿舍
紀文瀚	牛込区高田八幡版上求信旅館
汪廣業	牛込西五軒町十番地
呂邦棟	牛込区高田八幡坂山求信館
頼承奎	早稲田大学東北館
張福年	早稲田鶴巻町四百八十三番地千葉館
劉同彬	早稲田鶴巻町四百八十三番地千葉館

「第五冊の留学生に関する参考資料(注48)」より作成

### 1.3.4 留学費用

留学費用について、判明した39名の留学生の内、官費留学生が33名、公費が1名、私費が5名であった。私費留学生より、官費留学生が大多数を占めている。

### 1.3.5 教育歴

本冊の留学生たちの教育歴について、判明した58名の内、張宗華は来日前に湖北文普通中学堂に在学していた。その他、6名(張若寬、劉東漢、張開運、張宗華、張仁銳、陳曾楨)は湖広総督張宮保<sup>(50)</sup>の推薦で来日、張青選は河南学務処より派遣されていた。清国留学生部に入学する前、蹇念益は清華学校で普通学を学んだ。孫家樹は弘文学院を卒業していた。

清国留学生部予科卒業生52名の内、同部本科への進学者は28名であった(紀文瀚、夏道沛、劉彦、夏掄升、呂邦棟、方體華、藍經惟、頼承奎、隆福、永元、崇貴、春保、松林、穆都哩、常順、存忠、定安、延年、全桂、世謙、榮生、柯興魁、恒隆、崇文、文元、吳乃璋、張福年、劉同彬)。さらに、その内の5名(呂邦棟、藍經惟、吳乃璋、張福年、劉同彬)は同部研究科に、3名(劉彦、穆都哩、全桂)は

専門部に進学した。

ほか、専門部に進学した者は10名(湯鐵樵、王懋昭、汪德林、高国瑛、徳林布、童振鏞、袁家普、郭憲章、劉蔭榕、張務本)、大学部に進学した者は1名であった(解樹強)。

清国留学生部予科卒業生以外の者については、12名のうち6名が判明した。その内の進学者は3名であった(董鴻禕、方樞、潘自溶)。

以上42名の進学者は、教育歴の判明した58名の内の約72%を占めている。

### 1.3.6 帰国後の活動

帰国後、北京学部試験に合格した者は3名いた(汪翔、郭憲章、張務本)。追跡調査で26名の履歴を以下のように明らかにした。

1 汪翔 法政挙人。奉天提学使司(教育庁に相当)課長、北洋訳学館提調(清末の官職名)、麻城県知事、寛甸県知事、税務局局长、財政庁秘書を歴任。『夏口汪氏宗譜』を執筆。<sup>(51)</sup>

2 董鴻禕 1909年、オランダ公使書記官。<sup>(52)</sup>1911年、オランダ駐劄清国公使館参贊官。<sup>(53)</sup>1912年、教育部秘書長、次官。1913年、教育部総長代理。<sup>(54)</sup>

3 蹇念益 1907年、帰国。河南財政副監理。1909年、度支部主事。<sup>(55)</sup>1911年、河南省清理財政副監理官<sup>(56)</sup>。国民協進会常務幹事。1912年、統一党を創立、幹事。1913年、国会衆議員。1915年、反袁運動に尽力。<sup>(57)</sup>

4 方樞 奉天諮議局自治籌辦処課長、山東撫署(役所・衙門)副参事を歴任。1912年、國務院法制局参事。1914年、政治会議議員、政事堂参議。1916年、國務院法制局局长<sup>(58)</sup>

5 張烈 中華民国参議院議員。<sup>(59)</sup>

6 張青選 1906年、兄弟の張青峰と蒙陽東史村で新文工場を創立、チョークを製造。河南省、河北省、

山西省、北京などで売れ行きがよかった。これは鄭州市一のチョーク製造の工場。<sup>(60)</sup>

7 解樹強 1913年、参議院議員、憲法起草委員。同年国会解散後、江蘇省立法政専門学校教務長。<sup>(61)</sup>

8 陳曾榘 湖北省清丈局（土地建設産業局に相当）職員、麻城・武穴樞運局局長、呉興県統捐局局長、県知事、上海警察庁課長、中東路路警処秘書主任、靈龍・涇県県長を歴任。1935年、冀東防共自治政府秘書処・政務処処長、冀東統稅管理局局長。1938年、河北省公署建設庁庁長。1944年、河北省政府秘書長。1945年、中華民国南京国民政府（汪兆銘政権）華北政務委員会常務委員。<sup>(62)</sup>

9 藍經惟 1915年、渠県勸学所視学。1917-1919年、渠県中学堂の開設と再建に尽力。1929年、渠県民意諮詢委員会委員。<sup>(63)</sup>

10 隆福 1910年、帝国日報記者<sup>(64)</sup>

11 永元 1908年、八旗高等学堂監学。<sup>(65)</sup>1910年、八旗学務処。<sup>(66)</sup>1911年、北京宗室覚羅八旗高等学堂監学。<sup>(67)</sup>

12 崇貴 1908年、順天高等学堂教習。<sup>(68)</sup>教育部文書科に勤務。<sup>(69)</sup>

13 松林 1908年、八旗第一高等小学堂堂長。<sup>(70)</sup>1910年、八旗高等学校長。<sup>(71)</sup>

14 穆都哩 本名は穆六田、後に寧裕之と改名。満州族宗室。民国で著名な満族人小説家、筆名は儒丐。1907年、満州族宗室の留日学生恒鈞、烏沢声らと一緒に東京で『大同報』を創刊し、執筆者の一人。1923年に出版された長編小説『北京』は現代中国の文壇で初期における長編小説の一つ。1953年より、北京文史研究館館員。<sup>(72)</sup>

15 常順 1908年、八旗第六高等小学堂堂長。<sup>(73)</sup>1910年、八旗学務処。<sup>(74)</sup>1911年、視学官。<sup>(75)</sup>

16 存忠 1908年、公立求实中学堂教習。<sup>(76)</sup>

17 恒鈞 清朝宗室。1907年、満州族宗室の留日学

生穆都哩、烏沢声らと一緒に東京で『大同報』を創刊、執筆者の一人。熊範輿、沈鈞儒、雷光宇と一緒に清政府に最初の国会開設の請願書を提出。民国時期、国会議員を担当、工場を創設。京劇を研究していた。<sup>(77)</sup>

18 延年 1908年、民政部測繪学堂教習。<sup>(78)</sup>

19 世謙 1908年、鑲黄旗公学教習。<sup>(79)</sup>

20 榮生 1908年、八旗高等学堂監学。<sup>(80)</sup>

21 德啓 教育部統計課に勤務<sup>(81)</sup>

22 崇文 1911年、北京宗室覚羅八旗高等学堂教習。<sup>(82)</sup>

23 文元 1910年、八旗中学校長。<sup>(83)</sup>

24 劉同彬 1909年、清国北洋法政学堂歴史地理教習に赴任。<sup>(84)</sup>1911年、北洋法政学堂教習。<sup>(85)</sup>

25 潘自濬 挙人、内務部主事、直隸省議会議員。<sup>(86)</sup>

26 谷鐘秀 直隸高等師範学堂教員、直隸督署秘書。辛亥革命後、各省都督府代表聯合会の直隸代表。1912年、南京臨時政府参議院議員。1913年、憲法起草委員。1914年、歐陽振声と一緒に泰東図書館を創設、『中華新報』を創刊、編集長。1916年、段祺瑞内閣農商総長、全国水利総裁を兼任。著作は『中華民国開国史』、『外国地理』。<sup>(87)</sup>

本冊には、満州族の留学生がおり、ほぼ全員が帰国後、満州人向けの八旗学校で教員を担当した。しかし、満州族宗室の穆都哩と恒鈞は支配階層のメンバーであるにもかかわらず、君主制の統治に反対していた。この二人は東京で『大同報』の創刊に尽力し、執筆を担当した。この新聞の趣旨は立憲君主制の確立を目指して、国会開設を行い、また満州族と漢民族が平等に付き合うこと、さらに漢民族、モンゴル民族、回族、チベット族を統合することを主張した。<sup>(88)</sup>



1.4 第七冊の留学生について<sup>(89)</sup>

第七冊に揮毫した留学生20名の内、15名が明治41年（1908）清国留学生部師範本科第一回卒業生<sup>(90)</sup>、3名が同41年（1908）専門部政治経済科卒業生、1名が同41年（1908）大学部商科卒業生、1名が同39年（1906）清国留学生部予科卒業生であった。

## 1.4.1 年齢

第七冊の留学生は、20代が多数である。第二、四、五、七冊の四冊の留学生たちの年齢は、10代から30代まで分布し、20代が多数、というほぼ同様の傾向が見られる。

## 1.4.2 出身地

第七冊の留学生は、17名の出身地が判明、そのほとんどが浙江省出身の者達であった（表1-7）。

表1-7 出身地について（第七冊）

	省名	人数 (人)		省名	人数 (人)
	南方 地域	浙江		12	北方 地域
安徽		2			
江蘇		1			
雲南		1			
小計	4省	16		1省	1
合計	5省, 17人				

「第七冊の留学生に関する参考資料（注89）」より作成

## 1.4.3 住所

第七冊の留学生の内、2名の住所が判明した（表1-8）。しかし下宿の番地が不明であるため、早稲田大学のキャンパスに近いかどうかを判断することは困難である。

表1-8 住所について（第七冊）

氏名	住所
蘇澄	江戸総州館
黄人望	早稲田大学海瀛洲笹処

「第七冊の留学生に関する参考資料（注89）」より作成

## 1.4.4 留学費用

第七冊の官費留学生は14名、私費は2名、公費は1名となる。官費留学生が最も多かった。

## 1.4.5 教育歴

第七冊で教育歴が判明した20名のうち、早稲田大学に入る前に、他校で教育を受けた者は3名であった。姚煥は清華学校で日本語・日本文化を学び、その後、正則予備学校に入り、普通学を学んだ。程良楷は同文書院に学んだ。徐敬熙は成城学校に在学していた。

明治41年（1908）清国留学生部師範本科卒業生15名の中には、同39年（1906）に予科を卒業した者が12名いた（李超群、柳景元、馬毓駿、蘇澄、胡豫、謝德銘、包汝羲、魏賡江、王振聲、黄人望、楊文洵、桂陞）。明治41年（1908）本科卒業後、さらに同部研究科への進学者は9名であった（李超群、馬毓駿、楊道淵、胡豫、魏賡江、王振聲、楊文洵、聶登期、謝鍾靈）。

以上、9名の進学者は教育歴の判明した20名の内の45%を占めている。

## 1.4.6 帰国後の活動

帰国後、北京学部試験優等を取得した者は程良楷と胡文藻、中等を取得した者は徐敬熙であった。9名の履歴を追跡調査で明らかにした。

1 柳景元 1908年、帰国。沙湾公立両等小学堂を創立。1918年、浙江省議会議員。省立第十一中学教員、景寧県教育局局長。1922年、『景寧県統志』を編

纂。温州中学，稽山中学，景寧簡易師範学校の教員を歴任。日中戦争中，自宅で塾を開き，古文を教えた。戦後，浙江省通志館編集者。1947年，沙湾小学校校長。1950年，景寧県第1回人民代表大会議に参加，常務委員会会員に当選。<sup>(91)</sup>

2 胡豫 教育部普通教育司（小学校・中学校教育の管理）第1科（幼稚園小学校教育担当）課員<sup>(92)</sup>

3 程良楷 京師法政学堂教習，<sup>(93)</sup>1912年5月，教育部専門教育司（専門学校教育及び海外留学事務の管理）第2科（専門学校担当）課員。<sup>(94)</sup>

4 謝德銘 温州商業学校校長<sup>(95)</sup>

5 王振聲 資政院役員・議員<sup>(96)</sup>

6 黄人望 浙江省金華府中学堂及師範学堂<sup>(97)</sup>，北京大学，北京高等師範学校，北京女子高等師範学校の教員。馬叙倫と一緒に教育改革に尽力。五・四運動中，愛国学生の革命運動に支持。学生のデモ行進に参加。公益事業，教育事業に熱心。日中戦争中，呂公望と協力して浙江難民に救助を行い，難民工場副總經理，中央救助委員会浙江事務所主任を担当。<sup>(98)</sup>

7 徐敬熙 帰国後，教育部に勤務。<sup>(99)</sup>明治42年（1909），第二期計画基金募集報告（校友寄附第一回）一金五圓を寄付。<sup>(100)</sup>

8 楊文洵 1908年，帰国。宣統年間，江山県官立文溪高等小学堂堂長。1912年，浙江省立第八中学校長，教育改革を行なった。1915年，金衢嚴区省視学，省教育廳課長，二回目省立第八中学の校長。その後，上海中華書局で教科書の編集者。著作は，『普通教育新地理』八卷，『中学地理教科書』，『中外地理大全』十二卷，『地理概論』。<sup>(101)</sup>

9 胡文藻 明治42年（1909年），第二期計画基金募集報告（校友寄附第一回）一金五圓を寄付。<sup>(102)</sup>浙江清理財政局審核科課長，資政院浙江特派員，浙江財政司秘書，蘇州財政司秘書，浙江国税庁籌備処処長，浙江銀行監理官，湖北財政庁庁長，津浦筑路商

貨統捐局監督を歴任。1928年，国民政府財政部秘書。1929年，江西財政特派員。<sup>(103)</sup>

教育関係者の中では，柳景元は景寧県地方志<sup>(104)</sup>の編纂に取り組み，故郷の景寧県の文化振興に努力した。楊文洵は地理関係の教科書や著作を執筆し，地理教育に尽力した。黄人望が教鞭を執った北京大学，北京高等師範学校，北京女子高等師範学校には，魯迅も勤務していた。<sup>(105)</sup>

胡豫，程良楷と徐敬熙3人は教育部に勤務した。同部には勤務した早稲田大学出身の留学生が多い。この3名のほか，秘書長の董鴻禕<sup>(106)</sup>，文書課の崇貴<sup>(107)</sup>，統計課の徳啓<sup>(108)</sup>，普通教育司第2科の楊乃康<sup>(109)</sup>，専門教育司司長の林榮<sup>(110)</sup>などがいた。そして，留学生の一員として魯迅も同部社会教育司第2科に勤務していた。<sup>(111)</sup>教育部勤務者名簿を確認すると，留日学生出身の者が多いことが改めてわかる。留学生同士，とりわけ早稲田大学出身者の人的ネットワークの存在も窺える。

また，注目に値するのは，徐敬熙と胡文藻の2人が卒業後，早稲田大学に寄附したことである。母校の建設と発展に関心をもって貢献した留学生がいたことがわかる。

## 第2章 留学生調査に対する分析

第1章では，『鴻跡帖』に関連した留学生揮毫者を紹介した。これにより彼らの年齢，出身地，住所，留学費用，教育歴，帰国後の活動などの情報を整理した。本章で，それらの情報に関する問題点を挙げて分析する。

### 2.1 年齢について

『鴻跡帖』に掲載されている留学生は，20代が

メインであったが、10代と30代の者もいた。特に、30代の者はひときわ目立つ存在であった。彼らの年齢は何故幅広く分布していたのか。

科挙制度は、廃止される以前は、「科挙は支那人士の世に出る唯一の登竜門なり」<sup>(112)</sup>と評価されている。しかし、光緒31年(1905)、この「唯一の登竜門」であった科挙は廃止された。その後、「学堂開かれ、昨日の科挙に代はりたりといへども、門戸狹隘、路径險阻、これを攀づる尤も難く」<sup>(113)</sup>と指摘されたため、「都下、清国留学生の現在数は將に八千ならむとすと、科挙全廃、学堂不足、他に立身出世の途全く杜絶せる今日此際、其来航するもの倍蕪して滔々水の低きに就くが如けん」<sup>(114)</sup>と評されたように、留学は「立身出世」の道であり、多くの者はこの道を選択した。したがって、留学を選択した者の年齢層が幅広いと推測できる。

## 2.2 出身地について

前章の調査によると、留学生は中国南方地域出身者が圧倒的に多かった。この点は、拙稿<sup>(115)</sup>で論述したが、その要因を究明するための一つの有力な根拠として、下記の資料がある。

「丁酉の年(1897)に溯り、我が国の学生を日本に留学させるべきだと私が初めて勧めた。翌年に、まずは浙江省より留学生を派遣し始め、次いで湖北省も江南も留学生を日本に派遣した。私はそれらのことをすべてあらかじめ聞いていた。陸軍のほか、早稲田に入学した者は多数を占める」。<sup>(116)</sup>(翻刻・翻訳・句読点は筆者、以下同)

これは清国外交官の錢恂<sup>(117)</sup>が『鴻跡帖』に揮毫した文章の一部であり、上述した問題に答えた文でもある。

## 2.3 住所について

表2-1の通り、当時、早稲田大学は清国留学生向けの宿舎を建築した。

表2-1 早稲田大学清国留学生寄宿舍

	創立	所在地	舎坪数	敷地坪数
早稲田大学清国留学生寄宿舍(第一寄宿舍)	明治38年(1905)7月	東京市牛込区早稲田鶴巻町13番地	288坪	1300坪
早稲田大学清国留学生第二寄宿舍	明治38年(1905)8月	東京市牛込区早稲田鶴巻町266番地	190坪9合	300坪
早稲田大学清国留学生第二寄宿舍分舎	明治38年(1905)10月31日	不詳	不詳	不詳

〔明治39年度報告 早稲田大学清国留学生寄宿舍〕より作成(早稲田大学大学史資料センター所蔵8-26〔自明治39年度至同43年度〕清国留学生部寄宿舍事務報告)

第一寄宿舍は舎生室39室(3坪は38室、7坪は1室)が配置され、第二寄宿舍は24室(3坪は22室、4坪は2室)が配置された。<sup>(118)</sup>

「明治卅八年八月卅日及び同卅一日ノ両日ニ亘り、清国浙江省官費師範留学生一百名ノ内、七十八名ヲ第一寄宿舍ニ、其余二十二名ノ内十九名ヲ第二寄宿舍ニ収容シタルヲ以テ、本舎ノ開始トス」<sup>(119)</sup>と書き記されているように、「浙江省官費師範留学生100名」を迎えて寄宿舍の運営がスタートした。

明治40年に入ると、「本年度ニ於テハ全ク其取捨ヲ舎生ノ自由ニ一任セリ、於是乎規律の生活ノ念ニ乏シキ、清国留学生ニ於テハ自然ニ下宿生活ヲ好ミ、加フルニ一般下宿屋ニ於テモ可成清国留学生ヲ歓迎スルノ傾アリ、之等ノ事情ハ舎生ヲ減少セシムルノ原因タリシハ疑ナキト

コロナレトモ、亦第一寄宿舎ノ移転スルニ当り、之レガ完成時期已ニ後レ、学生ハ概ネ下宿屋ニ宿所ヲ定メ為メニ入舎セント志望セシモノモ自然下宿ヲナスコトナレリ」<sup>(120)</sup>と記されたように、学校の寄宿舎だけでなく、外部の下宿で自由に生活することも出来た。そして、外部の下宿も清国留学生を積極的に受け入れている。なお、第一寄宿舎は明治39年（1906）に移転されており、その間に他の下宿を探した留学生もいたと考えられる。<sup>(121)</sup>そのため、早稲田大学清国留学生寄宿舎は敷地や居住条件の制限がありながらも一部の留学生を受け入れた一方、一般の下宿は数多くの留学生を受け入れた。これも、前章で判明した住所の中で、早稲田大学の寄宿舎に寄宿した留学生がそれほど多くない理由であろう。

なお、留学生たちは、主に学校に近い下宿に寄宿していた。とりわけ牛込区鶴巻町にある下宿に住んでいた留学生が多かった。それについて、「町内には、早稲田大学寄宿舎、清国留学生第一、第二寄宿舎もあり、とくに留学生のための清国理髪店や中国料理店「時新館」「維新園」「早稲田華園」などがあった。いずれの店先にも青竜の黄色い旗を掲げ、料理の他に雑貨屋を兼ねる店もあった。大学が近いせいもあり、町内には学生のための下宿屋が多く、弥生館、保陽館、公文館、信陽館、福井館、東京館、金城館、静進館、大成館、鶴巻館、東陽館、鶴声館、秋林館、尚友館、北越館、愛名館、三崎館支店、寿館、日の出館、都留館、風光館、千葉館、三吉館、春芳館、玉水館、崎越館、松葉館などがあった」<sup>(122)</sup>と記されている。また、牛込区（現・新宿区）に住んでいた中国の政治家や革命家、中国革命運動の援助者もいた。次の

表2-2で、代表人物を取り上げて彼らの寄宿地を紹介する。

表2-2 代表人物の旧居

氏名	旧居
孫文	牛込区早稲田鶴巻町40番地（現・新宿区早稲田鶴巻町523番地、犬養毅の斡旋で1897年9月から約1年間、滞在）
黄興	牛込区東五軒町19番地（現・新宿区東五軒町3-22、黄興の帰国後に、宋教仁が住む）
宋教仁	豊多摩郡戸塚村大字下戸塚268番地（現・新宿区西早稲田1-16-20、来日当初、早稲田大学に通っていたところに居住。後に、民報社に近い牛込区東五軒町に移転）
章士釗	牛込区若宮町27番地（現・新宿区若宮町27番地）
梁啓超	牛込区東五軒町35番地（現・新宿区東五軒町4、1899年9月から3ヵ月滞在）
李大釗	豊多摩郡戸塚村大字下戸塚517番地（現・新宿区西早稲田2-5-2、1913年から来日。早稲田大学に学ぶ）
蒋介石	豊多摩郡大久保村大字東大久保307番地（現・新宿区新宿7-26、1907年から留学。振武学校、陸軍士官学校に通う）
宮崎滔天	豊多摩郡内藤新宿町字番集町34番地（現・新宿区新宿5-5、同地は中国革命同盟会の機関紙『民報』の発行所）

王永祥、高橋強『周恩来と日本 苦悩から飛翔への青春』白帝社 2002 P199-200より作成

このように、早稲田大学の近辺には中国の政治家や革命家、日本人の援助者が住んでいた。彼らは留学生たちと同一の地域に集中して、互いに交流したり、国際関係や国内問題について議論をしたりしていたことが推測される。密接な関係の中で、彼らの言動は留学生に深い影響を与えたであろう。

#### 2.4 留学費用について

前章で、官費留学生と私費留学生の割合を調べた。官費といい、私費といい、留学生たちは生活費や学費を、年間にどれほど費やしたのか。また、官費留学生は年間、清国政府からど

れほど資金を受け取ったのか。

留学の出費について、当時、外務大臣が清国皇帝に差し出した公文書には、「衣食・筆墨の費用は年間、約300円が必要である」<sup>(123)</sup>と書き記されており、一人当たりの年間の留学費用はおおよそ300円だと日本側が試算したことがわかる。

具体的に言うと、学費は年額10円から25円、下宿料は年額60円から90円、書籍・紙墨・筆費は年額30円、雑費は年額30円であり、年間の総額はおよそ150円から200円程度であった。<sup>(124)</sup>

これに対して、清国政府はどれほど経費を支出したのか。『官報』によると、「明治40年以降、清国留学生の経費予算は総額、金3万5千3百18元8分3厘」<sup>(125)</sup>ということであった。

一人当たり受け取った経費は年間、400元、200元、150元などがあり、額は個人によって異なっている。<sup>(126)</sup>

上述した日本の貨幣の単位「円」と清国の「元」は統一されていないため、清国政府が留学生に支給した経費で日本での学習や生活が十分にできるのかという問題は容易には判断しがたい。この問題を解明するため、当時の留学生たちが中国公使に差し出した書簡「私立五校の留学生が公使に呈する書簡」(私立五大学学生上公使函)<sup>(127)</sup>を活用する。この書簡の中では、留学生が八つの意見を発表した。

この中の第6条に、「学費を月ごとに支給することは障害がある」と書かれている。これは銀行の営業日時が月曜日から土曜日までの朝8時から午後3時ないし4時までであり、大学への登校とちがって、官費留学生2千3、4百人は講義に欠席しなければならないためである。したがって留学生は、銀行に行くことがどれほど時間や交通費の無駄になるだろうか、

という不満を抱いていた。<sup>(128)</sup>

彼らは毎月33元を受け取って、生活や学習上の必要経費を賄った。しかし、書籍、衣類等の購入ですぐに使い切ってしまうため、その金額では足りなかったのである。そのため、四半期または2ヶ月毎にそれ相応の金額を与えてほしい、という意見を出した。<sup>(129)</sup>

このように、官費留学生にとって、その授与された「奨学金」だけで生活することは困難であった。彼らの生活はそれほど豊かではなく、官費留学生でも懐具合がよくないほどであった。

## 2.5 教育歴について

表2-3により、留学生たちの教育歴、特に早稲田大学における学習歴をまとめた。前章で調査した留学生たちの教育歴を見ると、さらに進学した者が多かった。彼らの在学期間は3、4年間であった。早稲田大学への長期の在学期間に、彼らはその先の人生に影響する知識、さらに人的ネットワークを構築したであろう。ま

表2-3 「大学」自称期の大学部・高等予科及び付属学校について(明治35-大正14年)

大学部・高等予科	研究科	
	大学部(3年制)	政治経済学科
		法学科
		文学科
		師範科
		商科
		理工科
高等予科		
付属学校	研究科	
	専門部(3年制)	政治経済科
		法律科
		行政科
		国語漢文科
		歴史地理科
		法制経済及英語科(法制経済専修科)

付属学校	清国留学生部	予科（1年制）
		師範本科（2年制）
		特別予備科（1年制）
		普通科（3年制）
	研究科（1年制）	
	早稲田工手学校	
早稲田専門学校		

『早稲田大学百年史 総索引年表』「大学」自称期の大学部・高等予科呼称変遷図（明治35－大正14年）、「大学」自称期の付属学校呼称変遷図（明治35－大正14年）、「早稲田大学百年史年表」P227-228 明治35（1902）9・11条, P231 明治38（1905）9・11条, P232 明治39（1906）9条, P233 明治40（1907）9条, P234 明治41（1908）9条より作成

たこの点には、当時、主とした速成教育に対し、早稲田大学が、「難易遅速俱ニ務メテ其中ヲ執リ、次序ヲ以テ進ム等ヲ職ユルノ病ナク」<sup>(130)</sup>とあるように、留学生たちにユニークな長期教育の方針を施したことが検証できた。

## おわりに

本論では、『鴻跡帖』に揮毫した留学生全員の調査を進めた上で、彼らの年齢・出身地・住所・留学費用・教育歴・帰国後の活動についての問題を解明した。今後は、今回の人物調査に加えて、揮毫の解説を進めることで、留学生たちの思想を考察する。

〔投稿受理日2016.04.23／掲載決定日2016.06.01〕

## 注

- (1) 『早稲田大学百年史』第2巻 P180
- (2) 高木理久夫「早稲田大学図書館所蔵『鴻跡帖』について」（『早稲田大学図書館紀要』第63号 2016 P65-141）
- (3) 孫倩「史料『鴻跡帖』の一考察」（『社会学論集』第27号 2016 P37-52）
- (4) 調査した留学生278名の名簿は高木理久夫「早稲田大学図書館所蔵『鴻跡帖』について」と孫倩「史料『鴻跡帖』の一考察」に掲載されているため、本論で省略する。また、人物の関連情報は分量が多いため、こちらも割愛する。

- (5) 第二冊の留学生に関する参考資料は『鴻跡帖』第二冊の書画内容、『早稲田学報』に載せた関連記事や卒業生名簿（第137号P62-64, 162号P22-29, 174号P8, P9-15, 178号P21, 186号P9-10, 210号P9-15）、『早稲田大学中国留学生同窓録』（戊申夏刊）
- (6) 39名の留学生の氏名は明治39年清国留学生部豫科第一回卒業式卒業者名簿（『早稲田学報』第137号P62-64）に載っている。
- (7) 秦嶺・淮河線が800mm等降水量線であり、1月の0度等温線である。伝統上これを境に、「南北」が別れる。
- (8) 貝塚爽平・清水靖夫『明治前期・昭和前期東京都市地図2』柏書房株式会社 1996 P66-67
- (9) 記事「清国学部試験」『早稲田学報』第165号P41
- (10) 『光緒宣統兩朝上諭檔』広西師範大学出版社 1996 第31冊 P115より、1905年に科举制度は廃止された。
- (11) 崔聚成『歴代崔氏人物辞典 近现代卷』白山出版社 2013 P477
- (12) 『漣水県志』江蘇古籍出版社 1997 P957
- (13) 『寧波詞典』復旦大学出版社 1992 P368
- (14) 陳慕榕『青田県志』浙江人民出版社 1990 P732
- (15) 『營口通史』第1巻 万卷出版公司 2012 P653
- (16) 周家珍『20世紀中華人物名字号辞典』法律出版社 2000 P931, 『早稲田大学百年史』第2巻 P1104, 1106
- (17) 陳剛『中国民事訴訟法制百年進程』清末時期・第2巻中国法制出版社 2004 P655
- (18) 『湖北省志人物志稿』第4巻 光明日報出版社 1989 P1617
- (19) 『大庸県志』第九巻 人物志 上册 1985 P130-131, 『早稲田大学百年史』第2巻 P1103
- (20) 潘雲龍『近代中国史料叢刊』第三編 文海出版社 1966 P113
- (21) 第四冊の留学生に関する参考資料は『鴻跡帖』第四冊の書画内容、『早稲田学報』に載せた関連記事や卒業生名簿（第150号P54-60, 174号P9-15, 186号P9-10, 198号P6-14, 210号P9-15）、『早稲田大学中国留学生同窓録』（戊申夏刊）、『早稲田大学百年史』第2巻 P194, P1103, 1104, 1106
- (22) 76名の留学生の氏名は明治40年清国留学生部豫科第二回卒業式卒業者名簿（『早稲田学報』第150号P54-60）に載っている。

- 23 謝宏維『和而不同清代及民国時期江西万載縣的移民, 土著与国家』經濟日報出版社 2009 P245-247, 『早稲田大学百年史』第2卷 P194
- 24 『江西省志人物志』方志出版社 2007 P371, 張玉法『民国初年的政党』岳麓書社 2004 P565, 『早稲田大学百年史』第2卷 P1104, 1106
- 25 張林『新郷歴史名人』中国社会出版社 2003 P322-325
- 26 潘敏『江蘇日偽基層政權研究1937-1945』上海人民出版社 2006 P182
- 27 『湖北省志人物志稿』第4卷 光明日報出版社 1989 P1619
- 28 彭小奇『毛沢東教育思想研究 卷2 毛沢東中央蘇区教育実践と教育思想研究』湘潭大学出版社 2013 P68, 邱志紅『現代律師の生成と境遇』社会科学文献出版社 2012 P83, 『早稲田大学百年史』第2卷 P1104
- 29 咏梅『中日近代物理学交流史研究1850-1922』中央民族大学出版社 2013 P142, 175
- 30 『于都文史資料』第4輯 于都県印刷廠 1993 P42-46, 『早稲田大学百年史』第2卷 P1103, 1106
- 31 張友武『夏高生平事略』(『建湖文史選輯 第3輯』1989 P15-19)
- 32 周棉『中国留学生大辞典』南京大学出版 1999 P116, 江西省萍鄉市政協『中国民主革命的先驅: 湯增璧』甘肅人民出版社 2011 P3-21, 張枏, 王忍之『辛亥革命前十年間時論選集』第三卷 三聯書店 1977 P82-88
- 33 『江西省志人物志』方志出版社 2007 P367
- 34 何煥奎『新中華健康教育』新國民圖書社 1932
- 35 『江西中醫藥』1954年10月 P21-29
- 36 『蘇州市志』江蘇人民出版社 1995 P842
- 37 『單県文史資料』第1輯 1989 P118-131
- 38 『義馬市志』中州古籍出版社 1991 P313
- 39 馬敏『蘇州商會檔案叢編 第2輯 1912年-1919年』華中師範大学出版社 2004 P659
- 40 『汾陽県志』海潮出版社 1998 P975-976
- 41 『清徐県志』山西古籍出版社 1999 P849-850
- 42 『江西省志人物志』方志出版社 2007 P367-368, 周棉『中国留学生大辞典』南京大学出版社 1999 P269, 『早稲田大学百年史』第2卷 P1104, 1106
- 43 『南昌市志5』方志出版社 1997 P465
- 44 張玉法『民国初年的政党』岳麓書社 2004 P565, 『早稲田大学百年史』第2卷 P1104, 1106
- 45 『早稲田大学百年史』第2卷 P1104
- 46 『江西省志人物志』方志出版社 2007 P367
- 47 徐建文『江西之最』江西高校出版社 2002 P237-238
- 48 第五冊の留学生に関する参考資料は『鴻跡帖』第五冊の書画内容, 『早稲田学報』に載せた関連記事や卒業生名簿(第100号P829, 102号P42, 104号P42, 110号P218, 127号P36, 137号P57, P60, P62-64, 162号P15, P22-29, 166号P56, 167号P6, P11, 171号P8-9, 174号P8, P9-15, 178号P21, 185号P16, 186号P10, 187号P22, 188号P23, 191号P13, 192号P9-10, 198号P6-14), 『早稲田大学中国留学生同窓録』(戊申夏刊)
- 49 52名の留学生の氏名は明治39年清国留学生部豫科第一回卒業式卒業者名簿(『早稲田学報』第137号P62-64)に載っている。
- 50 「宮保」とは、明・清時代の官職の一つ。ここでは、張之洞のことを指す。
- 51 『東西湖区專志 人物志』武漢出版社 2006 P31
- 52 『早稲田学報』第167号P11「校友清国人の動静」
- 53 『早稲田学報』第192号P10「清国校友近時の發展」
- 54 薛綏之, 韓立群『魯迅生平史料匯編』第3輯 天津人民出版社 1983 P694
- 55 『早稲田学報』第167号P11「校友清国人の動静」
- 56 『早稲田学報』第192号P9「清国校友近時の發展」
- 57 侯清泉『貴州近現代人物資料統集』中国近現代史史料学会貴陽市会員連絡処 2001 P315-316
- 58 李盛平『中国近現代人名大辞典』中国国際廣播出版社 1989 P71
- 59 『早稲田大学百年史』第2卷 P1103
- 60 鄭州市地方志志辦公室『鄭州之最』2000 P60-61
- 61 『早稲田大学百年史』第2卷 P1103, 1106, 瀋雲龍『近代中国史料叢刊』第三編 文海出版社 1966 P621
- 62 張憲文, 方慶秋『中華民国史大辞典』江蘇古籍出版社 2001 P1103
- 63 『渠県志』四川科学技術出版社 1991 P890
- 64 『早稲田学報』第187号P22「校友動静」
- 65 『早稲田学報』第166号P56「八旗高等学堂參觀及滿人校友会」
- 66 『早稲田学報』第187号P22「校友動静」
- 67 『早稲田学報』第192号P10「清国校友近時の發展」
- 68 『早稲田学報』第166号P56「八旗高等学堂參觀及滿人校友会」

- 69) 孫瑛『魯迅在教育部』天津人民出版社 1979 P14
- 70) 『早稲田学報』第166号P56「八旗高等学堂參觀及満人校友会」
- 71) 『早稲田学報』第187号P22「校友動静」
- 72) 劉鳳雲, 董建中, 劉文鵬『清代政治与国家認同』(上) 社会科学文献出版社 2012 P28
- 73) 『早稲田学報』第166号P56「八旗高等学堂參觀及満人校友会」
- 74) 『早稲田学報』第187号P22「校友動静」
- 75) 『早稲田学報』第192号P10「清国校友近時の發展」
- 76) 『早稲田学報』第166号P56「八旗高等学堂參觀及満人校友会」
- 77) 劉鳳雲, 董建中, 劉文鵬『清代政治与国家認同』(上) 社会科学文献出版社 2012 P28
- 78) 『早稲田学報』第166号P56「八旗高等学堂參觀及満人校友会」
- 79) 同上
- 80) 同上
- 81) 孫瑛『魯迅在教育部』天津人民出版社 1979 P15
- 82) 『早稲田学報』第192号P10「清国校友近時の發展」
- 83) 『早稲田学報』第187号P22「校友動静」
- 84) 『早稲田学報』第171号P9「校友動静」
- 85) 『早稲田学報』第192号P10「清国校友近時の發展」
- 86) 劉樹鑫『南皮県志』成文出版社 1968 P838
- 87) 『早稲田大学百年史』第2巻 P1104, 1106, 馬洪武『中国近現代史名人辞典』档案出版社 1993 P311
- 88) 齊鐘久『近代中国報道1839-1919挿図本』首都師範大学出版社 2000 P625
- 89) 第七冊の留学生に関する参考資料は『鴻跡帖』第七冊の書画内容, 『早稲田学報』に載せた関連記事や卒業生名簿(第102号P42, 137号P62-64, 143号P59, 161号P49, 162号P14-15, P22-29, 165号P41, 166号P55-56, 167号P6, 169号P9, 174号P9-15, 188号P24, 190号P10), 『早稲田大学中国留学生同窓録』(戊申夏刊)
- 90) 15名の留学生の氏名は明治41年清国留学生部師範本科第一回卒業式卒業者名簿(『早稲田学報』第162号P22-29)に載っている。
- 91) 『景寧畚族自治県志』浙江人民出版社 1995 P554
- 92) 孫瑛『魯迅在教育部』天津人民出版社 1979 P15
- 93) 『早稲田学報』第166号P55「北京早稲田大学校友会」
- 94) 孫瑛『魯迅在教育部』天津人民出版社 1979 P16
- 95) 『楽清文史資料』第6輯 1988 P118
- 96) 『早稲田学報』第190号P10「清国資政院と當大学出身者」
- 97) 『早稲田学報』第169号P9「校友動静」
- 98) 『金華県志』浙江人民出版社 1992 P723
- 99) 黄昌勇『老交大的故事』江蘇文艺出版社 2012 P40
- 100) 『早稲田学報』第167号P6 第二期計画基金募集報告(校友寄附第一回), 第188号P24 第二十八回早稲田大学報告 第六基金
- 101) 『衢州文史資料』第7輯 浙江人民出版社 1989 P196-197
- 102) 『早稲田学報』第167号P6 第二期計画基金募集報告(校友寄附第一回), 第188号P24 第二十八回早稲田大学報告 第六基金
- 103) 劉国銘『中国国民党百年人物全書』下巻 團結出版社 2005 P1715
- 104) 地方志とは, 州や県など一地域を単位とした中国の総合的地理書。
- 105) 片山智行『魯迅 阿Q中国の革命』中央公論社 1996 P176-177より, 「一九二〇年八月から, 魯迅は北京大学, 北京高等師範学校の非常勤講師を兼務していたが, 磚塔胡同に転居した直後の一九二三年秋から, こんどは北京女子高等師範学校やその他の学校の非常勤講師もひき受けた」と書かれている。
- 106) 明治37年(1904) 専門部政治経済科卒業, 明治39年(1906) 研究科卒業
- 107) 明治39年(1906) 清国留学生部予科卒業, 明治41年(1908) 同部師範本科博物学科卒業
- 108) 明治41年(1908) 留学生部師範本科物理化学科卒業
- 109) 明治39年(1906) 清国留学生部予科卒業, 明治41年(1908) 同部師範本科博物学科卒業
- 110) 明治37年(1904) 専門部政治経済科卒業, 明治38年(光緒31) 殿試及第
- 111) 孫瑛『魯迅在教育部』天津人民出版社 1979 P16。なお, 魯迅が教育部に勤務していた経歴について, 片山智行『魯迅 阿Q中国の革命』中央公論社 1996 P254より, 「一九一二年五月, 臨時政府の移転にともない北京に移り, 教育部社会教育司第二科(のち一科)科長となる」と書かれている。
- 112) 青柳篤恒「再び支那留学生問題に就て」(『東京朝日新聞』1905年11月12日 P3より)。なお, 科挙



- に対して、宮崎市定は「旧中国では官吏になることが最も名誉であるとともにまた最も有利な職業である。そこで有産知識階級の子弟は我も我もと科擧の狭い門に殺到する」と評価している。『科擧 中国の試験地獄』2003 P220)
- (113) 青柳篤恒「再び支那留学生問題に就て(続)」(『東京朝日新聞』1905年11月13日 P3)
- (114) 同上
- (115) 孫倩「早稲田大学における清国人留学生」『ソシオサイエンス』Vol. 19 2013 P110-111にて、中国南方地域出身の留学生が多い原因を調べた。
- (116) 『鴻跡帖』第一冊に収録
- (117) 銭恂は湖北から日本へ派遣される留学生の監督官として、明治31年(1898)、来日した。もちろん単なる学生監督官ではなく、清朝きっての実力者である張之洞の日本における名代でもある。(高木理久夫「銭恂と早稲田大学図書館」早稲田大学図書館報76 2008 P8)
- (118) 「明治39年度清国留学生部寄宿舎事務報告」(早稲田大学大学史資料センター所蔵 8-26〔自明治39年度至同43年度〕清国留学生部寄宿舎 事務報告)
- (119) 同上
- (120) 「明治40年度清国留学生部寄宿舎事務報告」(早稲田大学大学史資料センター所蔵 8-26〔自明治39年度至同43年度〕清国留学生部寄宿舎 事務報告)
- (121) 同上
- (122) 王永祥、高橋強『周恩来と日本 苦悩から飛翔への青春』白帝社 2002 P197-198
- (123) アジア歴史資料センター Ref.B12081617000(第38画像目)、在本邦清国留学生関係雑纂／陸軍学生之部 第一巻(B-3-10-5-3\_1\_001)(外務省外交史料館)
- (124) 『中国人日本留学史』くろしお出版 1970 P182
- (125) 『官報 游学生監督処』光緒33年7、8月第8、9期 P4-9「学生経費予算表」より
- (126) 同上P34
- (127) 『官報 游学生監督処』光緒33年10月第11期 P197-213
- (128) 同上P208-209
- (129) 同上P209
- (130) 「早稲田大学清国留学生部主意」(早稲田大学大学史資料センター所蔵 8-01〔明治三十八年頃 清国留学生関係書類〕)

## 参考文献

- 青柳篤恒「再び支那留学生問題に就て」『東京朝日新聞』1905年11月12日
- 青柳篤恒「再び支那留学生問題に就て(続)」『東京朝日新聞』1905年11月13日
- 于都県委員会文史資料研究委員会『于都文史資料』第4輯 于都県印刷廠 1993
- 宮口市史志辦公室編『宮口通史』第1巻 万巻出版公司 2012
- 咏梅『中日近代物理学交流史研究1850-1922』中央民族大学出版社 2013
- 王永祥、高橋強『周恩来と日本 苦悩から飛翔への青春』白帝社 2002
- 貝塚爽平・清水靖夫『明治前期・昭和前期東京都市地図2』柏書房株式会社 1996
- 片山智行『魯迅 阿Q中国の革命』中央公論社 1996
- 金華県志編纂委員会『金華県志』浙江人民出版社 1992
- 義馬市地方史志編纂委員会『義馬市志』中州古籍出版社 1991
- 邱志紅『現代律師的生成与境遇』社会科学文献出版社 2012
- 景寧畚族自治県志編纂委員会『景寧畚族自治県志』浙江人民出版社 1995
- 侯清泉『貴州近現代人物資料統集』中国近現代史史料学会貴陽市会員連絡処 2001
- 黄昌勇『老交大的故事』江蘇文芸出版社 2012
- 湖北省地方志編纂委員会『湖北省志人物志稿』第4巻 光明日報出版社 1989
- 『江西省志人物志』編纂委員会『江西省志人物志』方志出版社 2007
- 江西省萍郷市政協『中国民主革命的先驅：湯増壁』甘肅人民出版社 2011
- 崔聚成『歴代崔氏人物辞典 近現代巻』白山出版社 2013
- 斉鐘久『近代中国報道1839-1919挿図本』首都師範大学出版社 2000
- さねとう・けいしゅう『中国人日本留学史』くろしお出版 1970
- 四川省渠県地方志編纂委員会『渠県志』四川科学技術出版社 1991
- 謝宏維『和而不同清代及民国時期江西万載県の移民、土著与国家』経済日報出版社 2009
- 周家珍『20世紀中華人物名字号辞典』法律出版社

- 2000
- 周棉『中国留学生大辞典』南京大学出版 1999
- 徐建文『江西之最』江西高校出版社 2002
- 潘雲龍編『近代中国史料叢刊』第三編 文海出版社 1966
- 政協建湖県文史資料征集研究委員会『建湖文史選輯 第3輯』1989
- 政協单県文史資料研究委員会『单県文史資料』第1輯 1989
- 清徐県地方志編纂委員会編『清徐県志』山西古籍出版社 1999
- 薛綏之、韓立群『魯迅生平史料匯編』第3輯 天津人民出版社 1983
- 浙江省衢州市委員会文史資料研究委員会『衢州文史資料』第7輯 浙江人民出版社 1989
- 蘇州市地方志編纂委員会『蘇州市志』江蘇人民出版社 1995
- 孫瑛『魯迅在教育』天津人民出版社 1979
- 孫倩「早稲田大学における清国人留学生」『ソシオサイエンス』Vol.19 2013
- 孫倩「史料『鴻跡帖』の一考察」『社会学論集』第27号 2016
- 高木理久夫「銭恂と早稲田大学図書館」早稲田大学図書館報76 2008
- 高木理久夫「早稲田の清国留学生－『早稲田大学中国留学生同窓録』の記録から－」『早稲田大学図書館紀要』第62号 2015
- 高木理久夫「早稲田大学図書館所蔵『鴻跡帖』について」『早稲田大学図書館紀要』第63号 2016
- 『大庸県志』編纂委員会『大庸県志』第九卷 人物志 上冊 1985
- 鄭州市地方史志辦公室『鄭州之最』2000
- 『中華人民共和國年鑑2012』人民出版社 2012
- 『中国統計年鑑2014』中国統計出版社 2014
- 中国第一歴史檔案館編『光緒宣統兩朝上諭檔』広西師範大学出版社 1996
- 張玉法『民国初年の政党』岳麓書社 2004
- 張憲文、方慶秋『中華民国史大辞典』江蘇古籍出版社 2001
- 張枏、王忍之『辛亥革命前十年間時論選集』第三卷 三聯書店 1977
- 張林『新郷歴史名人』中国社会出版社 2003
- 陳剛『中国民事訴訟法制百年進程』清末時期・第2卷 中国法制出版社 2004
- 陳慕榕『青田県志』浙江人民出版社 1990
- 南昌市地方志編纂委員会編『南昌志5』方志出版社 1997
- 寧波詞典編委會『寧波詞典』復旦大学出版社 1992
- 潘敏『江蘇日偽基層政權研究1937-1945』上海人民出版社 2006
- 馬洪武『中国近現代史名人辞典』档案出版社 1993
- 馬敏『蘇州商会档案叢編 第2輯 1912年-1919年』華中師範大学出版社 2004
- 汾陽県志編纂委員会『汾陽県志』海潮出版社 1998
- 武漢市東西湖区地方志編纂委員会『東西湖区專志 人物志』武漢出版社 2006
- 彭小奇『毛沢東教育思想研究 卷2 毛沢東中央蘇区教育実践と教育思想研究』湘潭大学出版社 2013
- 宮崎市定『科学 中国の試験地獄』中央公論新社 2003
- 樂清県委員会文史資料研究委員会『樂清文史資料』第6輯 1988
- 李盛平『中国近現代人名大辞典』中国国際廣播出版社 1989
- 劉国銘『中国国民党百年人物全書』下卷 團結出版社 2005
- 劉樹鑫『南皮県志』成文出版社 1968
- 劉鳳雲、董建中、劉文鵬『清代政治与国家認同』(上) 社会科学文献出版社 2012
- 漣水県地方志編纂委員会『漣水県志』江蘇古籍出版社 1997
- 早稲田学会『早稲田学報』明治30-45年
- 早稲田大学大学史編集所『早稲田大学百年史』第2卷 早稲田大学出版部 1981
- 参考史料
- 『官報 游学生監督処』光緒33年(1907)7、8月第8、9期,10月第11期 早稲田大学図書館所蔵
- 『鴻跡帖』全七冊 早稲田大学図書館所蔵
- 〔明治三十八年頃 清国留学生関係書類〕早稲田大学大学史資料センター所蔵 資料番号:8-01
- 〔自明治39年度至同43年度〕清国留学生部寄宿舎事務報告 早稲田大学大学史資料センター所蔵 資料番号:8-26
- 『早稲田大学中国留学生同窓録』(戊申夏刊)早稲田大学図書館所蔵 請求記号ト10-845